
結社の迅雷

デビル涼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結社の迅雷

【Nコード】

N6178Y

【作者名】

デビル涼月

【あらすじ】

碧の軌跡〜つながる姉妹の絆〜のIFストーリーです。

本来イリアに保護されるはずだったリリスが結社に保護された場合の物語を描いたものです。5章序盤の結社が引くまでを描いていきます、最後はオリジナルなのでその辺が嫌だという方はお控えください。

本来の小説を書いた時に思いついた書きたいと感じた小説なのでおそらく短めで終わります。

1話「邂逅」

?? side

「それでは 幻焰計画 の見届け、頼みますよ。」

暗がりの広がる場所、星辰の間で二人の人物が会話をしていた。

「わかっています、すべては大いなる 盟主 のために。」

あたりに透き通る澄んだ声、姿が見えないのでどのような人物かを特定することもできない。

「そつえば………リリースはすでにクロスベルにいたのでしたっけ？」

「はい、おそらく今はカンパネルラと共に行動しているはずですが、早く合流したいものですね。」

先ほどの澄んだ声とは違って変ってやさしい口調で話す。

「ふふ、あなたはあの子のことを随分と好いているんですね。」

「私だけではありません、あの三人も、そしてカンパネルラでさえもリリスに心を開いていますからね。」

「そうでしたね、あの子は結社の中でも特別な存在でした、すぐにみな的心を掴んで……それゆえか、剣帝が亡くなったと聞いた時のあの子は見ていられませんでした。」

その声に若干の悲しみが混じる。

「……それは私もでした、リリスはいつも 剣帝 の傍にいましたね、レンと一緒に。おそらく…… 実の兄のように慕っていたのでしょう。」

そしてあの子はそのナンバーを受け継いだ、そう付け加えた。

「実の兄のように……そう言うならばあなたもでしょう。あの子はあなたの事も実の姉のように慕っていましたよ、そしてあなた自身も実の妹のように可愛がっていた。」

二人は昔を……といっても1年前のことなのだがとても懐かしむように話す。

「そうですね……さて、すこし話し込んでしまいました、私はそろそろ失礼しますね。」

「ふふ、わかりました、それでは御武運を。」

その言葉を皮切りにその二人の気配はその部屋から消えた。

?? side end

――ミシュラムー

「いつまで隠れているつもりだ！いい加減に出てこい！」

夜の静けさの漂う中、一人の少年の声が響く。

その瞬間パチパチと誰かが手を叩く音が聞こえた。

「ウフフ、よくわかったねえ、」

「素晴らしい感の良さですね、さすがは数多の事件を解決してきた特務支援課のリーダーというわけですか。」

少年の声に続いてまだ幼さの残る少女の声が、屋根の上からした、先ほどまで正体不明の魔獣と戦っていた特務支援課の面々は声のした方向に視線が動く。

「なっ……！？」

「男の子と……女の子！？」

「……………気配を感じませんでした。」

「てめえら……………何モンだ？」

上から支援課のメンバー、ノエル、エリイ、ティオ、ランディが各々の反応を示す。

「うふふ、つれないなあ。一度すれ違っているはずだし知らぬ仲じやないっていうのに……………ねえ、特務支援課の諸君？」

「あなた、もしかして……………！」

「ヨナの部屋でロイドさんたちを罠にかけようとしたハッカー……」

そう、ロイドたちは以前ヨナの依頼でジオフロントに潜った、そこで部屋に閉じこまれポムツとでの対戦を挑まれたのだ、あぶないところだったがティオの助けにより無事なきを得た。

「……そしてテロリストたちにタワーの情報を流した張本人か。」

ロイドが静かに言う。

「ああ、あのポムツとつていう動力ゲームで負けた時ですね、まあ意外と手先不器用ですからね。」

少女が少年に少し笑みをこぼしながら言うと、少年は少し恥ずかしそうに答える。

「しょうがないだろ、あの時はあれが初めてだったんだからさ。」

支援課リーダーのロイドはこのやり取りを見ていたがすぐに切り出す。

「そちらの女の子は会ったことはないが………お前は工房ですれ違

「つて以来だな？」

「ウフフ、正解。身喰らう蛇が執行者、No.0 道化師力
ンパネルラ。以後お見知りおきを願うよ。」

そう少年が答えた瞬間、支援課メンバーが驚愕の表情を表す。

「っ……………！」

「リベールを混乱に陥れた謎の秘密結社……………！」

「あの工房の前で会った以上、関係があるとは思っていたが……………」

「ということはまさか……………その横の女の子もですか？」

今まで話しに入ってこなかった少女に皆の視線が集まる。

「そうですね、それでは私も名乗りましょう、身喰らう蛇 執行
者、No.2 迅雷 リリスです。どうかお見知りおきを願います。」

「やはり君も結社の一員だったのか……まあそれにしても、君たちがテロリストに協力していたなんてね……」

「ウフフ、彼らも災難だったよね。黒月に 赤い星座 ……厄介な連中が出てきたらねえ。」

「そうですね、たしかに帝国の方たちはお気の毒でした、なにも命まで奪うことはなかったでしょうに。」

少年とは裏腹に少女は少し悲しそうに話す。

「そんなこと言って！！あの人たちは仲間だったのになぜ助けなかったのですか！！」

「それは当然です、私たちには私たちの計画があります、彼らには本当に心苦しかったですが犠牲になってもらいました。」

「フフ、そうそう、特に僕にとってはただの駒だからねえ。彼らの主張やイデオロギーにはまったくもって興味はないんだよ。」

「くっ……」

カンパネルラの物言いにノエルが悔しそうに顔をゆがませる。

「そっちの女の子は本当にそう思っているようだけど………君は随分といい性格しているじゃないか。」

「……ワジさんといい勝負なのではないかと。」

すると今まで黙っていたロイドが口を挟む。

「……戯言はそこまでだ。このクロスベルで何をしようとしている？そして何より………」

ロイドは武器を構え大声で叫ぶ。

「何よりも………キアをどこへ連れ去った！！力ずくでも話してもらうぞ！！」

その言葉にカンパネルラは楽しそうに、リリスは見定めるように見る。

「ウフフ、いい気迫だねえ、でも君たちのお嬢様にh「カンパネルラさん、少し待ってください。」リリス？」

そういつてリリスはカンパネルラの前へと出る。

「私たちはその少女の居場所を知っています……教えてほしいですか??」

「ふざけるな!!」

「そうです、早くキアの居場所を教えてください!!」

「ふふ、なら……」

リリスは屋根から飛び降り、支援課の前に立つ。

「私を倒したなら教えて差し上げましょう。」

リリスは腰に差した刀を引き抜き支援課の方へと向ける、その瞬間濃密な闘気が支援課へと飛ぶ。

「くっ!!」

「こいつは……相当やばいぞ！」

「でも立ち止まるわけには行かないわ！」

「そうですね、キーアちゃんを取り戻すために！」

「やれやれだね……（まさかここで 迅雷 と遭い合うことになるなんてね……）」

最初はリリスの放つ闘気に飲まれていた支援課だがすぐに立て直し、リリスへと武器を構える。

「行くぞみんな！一気にケリをつける！！」

「「「「ええ（はい）（おう）（サー）（了解）「「「「」

その支援課の声を聴いた瞬間少しではあるがリリスが微笑む。

「ふふ、いい気迫ですね……さあ来なさい、特務支援課！！」

迅雷と特務支援課が激突する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6178y/>

結社の迅雷

2011年11月18日21時58分発行